

ジェイムズ・ジョイスの「痛ましい事件」

米 本 義 孝

一

作品の評価をめぐる、その作者と批評家たちのあいだで意見がわかれる場合がある。ジェイムズ・ジョイスが『ダブリンの人びと』十五編中七番目に完成した「痛ましい事件」はこれにあたる。すなわち、彼は、「痛ましい事件」を「レースのあとで」とともに最悪の二作品と言い、全体に書き改める意向を弟にもらすほどの短編に不満をもっていた。それに対して、おおかたの批評家たちはこの作品に好意的である。^①さらに、専門家だけでなく、この作品は一般読者に十五の短編のなかでもっとも親しまれており、多くの『短編小説選』に収められ、ラジオやテレビでドラマ化されている。『ダブリンの人びと』のなかでは物語の変化に富んでいることと、筋が明快にはこばれていることがその主な理由である。

「痛ましい事件」(このテキストは本稿の最後に収録)は、作品に有機的な統一をあたえる筋をもち、中年の独身男に焦点をしぼり、彼が偶然知りあった既婚夫人との交際を中心に物語が展開している。まず、最初の四つのパラグラフで、世間から孤立した生活を送る、主人公ジェイムズ・ダフィーの下宿の位置やその部屋の内装と調度品、彼の容貌と職業、食事などの日常の習慣や信条、および

主人公の排他的な気質が描出されている。これが「起」である。その彼がある晩音楽会で隣あわせたエミリー・シニコウという同年輩の婦人と交際をはじめるところから、彼がプラトニックな関係を望んだのに彼女が彼を異性として意識した振る舞いにでようとしたために、彼はその交際を絶ち、以前と同じく外部との接触を最小限に抑えた生活に戻るまでが「承」。絶交後四年の歳月が流れたある晩、ダフィーはこの物語の表題と同じ副見出しをつけた新聞記事を目にする。二年ほど前からアルコール中毒患者同然であったシニコウ夫人が縊死した事件を詳細に長々と伝えるこの記事が「転」。ダフィーは、かつて精神的な交際をしたはずの相手の顛末を新聞記事から知り、相手を呪い自己嫌悪にかられる。しかし、自問自答するうちに彼女の墮落と死の原因は狭い道德観に縛られた彼自身にあると悟り、真の孤独に陥るのが「結」である。

このようにメロドラマ仕立ての単純な物語でありながら、「痛ましい事件」が高い評価をうけているのは、表現形式に工夫が凝らされているからである。なかでも、文体は多種多様な言い回しや豊富なイメージに満ち、その微妙に変化する文体が物語の進展や主人公の状況と巧みに融合して効果を高めている。この物語は、直接話法による短い二箇所とシニコウ夫人の事故を報道する新聞記事とを除

いては、作品に登場しない第三者自身の口をとおして語られている。この語り手は、彼が描出する世界と人物たちから自己を排除しながら、ダフィーと一連の出来事とをながめている。ジョイス作品には、語り手はその客観描写のなかで、主人公が使うような言い回しを折りまげて主人公の心理状態を三人称単数過去時制で伝えることが多い。「痛ましい事件」でも、語り手はときおり、状況によって揺れ動くダフィーの内面にあわせてその口調をまねたりダフィーの言語を用いたりしながら、物語っている。このような手法によって、語り手は自己と登場人物とのあいだの距離をたもちながら、状況におうじてその語りを自在に変える。そのため、ときにはダフィー（あるいはシニコウ夫人）の言葉や意識なのか、語り手の陳述なのか決めがたいこともある。このような曖昧な記述はジョイス文学の特徴のひとつである。

そこで本稿では、視点や文体に注目しながら、「痛ましい事件」をすぐれた芸術作品という観点で論じ、最後にこの作品が作者ジョイスの意に満たなかったことを考えてみたい。

二

最初の四つのパラグラフでは、物語を展開させるうえでの前置きとして、一人の人物像が精密に描かれている。『ダブリンの人びと』ではめずらしく、短編としては伝統的な書き出しで、しかもこれに物語全体の五分の一（ジョナサン・ケープ社版のテキストで二頁半）ものスペースが割かれている。われわれはここで、ジェイムズ・ダフィーが人間同士の交わりに消極的であり、俗悪と知っている周囲の世界から自己を遠ざけていることを知る。彼は、同胞と国の文化に毒舌をはき、他人との絆を拒絶し、おのれの知性を誇り、

自己の世界に閉じこもっている。彼の言動のなかに過度の自己愛がふくまれているのはこの性癖のためである。そして彼の自己愛は、他人をみずに、距離をおきながらも絶えず自己をみるという形であられる。

彼は自分の肉体に少し距離をおき、自分自身の行為を疑わしげに横目で見つめながら、生きていた。彼には奇妙な自伝執筆癖があつて、ときおり自分自身について主語に三人称を、述語に過去形を使った短い文を心のなかで作ったりした。一度も乞食に施しをしたことはなく、頑丈な榛の杖を持てしつかりとした足どりで歩いた。

ダフィーは、自己を人称と時制の両方で客観視し、言語をとおして自己中心的な世界を構造化する癖がある。この主人公に同調するかのように、第三者の視点による前半の四つのパラグラフは、ダフィーの内面にふみこむことなく、三人称過去時制による外面描写に終始している。すなわち、人間愛に欠けた冷徹なダフィーの性格を反映したような、客観的な文体が支配的であるといえる。

この語り手は自己の語りのなかに、それとなく主人公の考えを挿入することがある。たとえば、第二パラグラフで「中世の医者ならば彼を土星的だと言っただろう。彼の顔はこれまでの年月の物語をきざんでおり、ダブリンの街と同じ茶色をしていた」という文章は、語り手の皮肉な見解とも、ダフィーの自嘲気味な吐露ともとれなくもない。また、「そこ（安食堂）ならばダブリンの社交界のけばけばしい若者どもにつきあわされないですみ、献立表にもまずごまかしがないからである」はダフィーの見方である。言語面でも、

ダフィーの行動範囲の限界をしめす語や文句が、その語りのなかに差し挟まれている。たとえば、語り手は、「*never*」(「決して」)、「*always*」(「いつも」)、「*every*」(「いつも」)などを使っている。前頁下段で引用したうちの最後の一文のような言い回しをする。これらの語は一定不変や永続状態を意味するものであり、日常生活を固定化して他と妥協しないダフィーにふさわしい。このように、ダフィーの見方と言葉づかいを語りのなかに取り入れることで、語り手はダフィーに寄り添った視点でその人間像を描いているという印象をあたえている。

ダフィーの生活の特質はその停滞にある。物語の冒頭で、語り手は注意深く言葉を選び、家の外側から内側へ、ひとつの対象から次の対象へゆったりと目を転じながら、ダフィーが荒涼とした飾り気のない世界に住むことを描出している。物語の進行を遅らせるこの詳細な描写は、自分に足かせをして他者から撤退した男の人格とそのまま結びつく。

ジェイムズ・ダフィー氏がチャペリゾッドに住んでいるのは、ダブリンの市民であっても市の中心部からできるだけ離れて暮らしたかったからと、ダブリンの他の郊外はどれも下品で、現代風で、きざだと思ったからだ。彼は古い陰気な家に住み、どの窓からも廃業になった蒸溜酒製造所や、ダブリン市内を貫いている浅い河の上流を見わたすことができた。絨毯の敷いてない部屋の、非常に高い壁には絵などというものは掛かっていない。

以下も郊外の三流住宅地にある部屋の克明な描写をとおして、ダ

フィーの生活が、浅い河が流れる文化の衰弱した都市と同じように、空虚であることを漂わせている。実用本位で貧弱な家具類、本棚の書物の並べ方や、書類と筆記用具などの整理の仕方から、神経質で几帳面なダフィーの性格が窺われる。このように第一パラグラフは、いかなる比喩も象徴的な意味合いもたない、長々とした表層描写でありながら、本人を登場させる前に、その本性を知る手掛かりとなっている。

M・マガラナーがジョイスはニーチェの「超人」の理論をダフィーの性格づくりの規準にしたと言うように、キリスト教の原理に反対し社会や政治上の既成の価値を認めないその理論に従うような、行状や思考をダフィーはする。そのような「超人」的な男が音楽会で既婚夫人と知りあって、「二人で話しているあいだに、彼は彼女を永遠に記憶にとどめようとした」という態度をとったり、「かなり豊かな胸のふくらみをみせるアストラカン地のジャケット」を気に入ったり、その女性と交際をはじめたりすることに違和感をもつ読者がいるかもしれない。たしかに、ダフィーは彼の環境に屈せず、日常の社会の因襲を拒絶する。しかし、彼は完全な隠遁者ではなく、その境目で生活する中途半端な「超人」なのである。主義主張が徹底できない彼の性格を暗示する描写が散見されるのもそのためである。たとえば、「教会も信条もなかった」と自認しながら、布表紙を付けてローマカトリック教の教えを説いたテキストを保持している。シニコウ夫人との友情がふかまると「彼女は彼の贖罪司祭となつた」、それがくずれると彼女の部屋を「けがされた告解室」と語り手は言う。ダフィーは、彼女の懺死を伝える報道記事を再読するとき、「司祭が祈禱の密誦を唱えるときのように唇を動かして」読む。シニコウ夫人の事故に対する彼の最初の反応は「まったくもっ

て('Just God')、なんたる結末だ！」であり、彼女の運命に神の大義が下ったと確認する。T・S・コノリーは、こういう形での宗教のイメージの蓄積は主人公の内面的な分裂を作者が読者に伝えているのだと言う。さらに、几帳面なダフィーが引き出しに林檎を置き忘れて熟しすぎたという矛盾は、キリスト教の原理にとらわれて禁断の実を食べないというあらわれでもあろう。

ダフィーの性格を反映して、彼の「部屋を支配する色彩は礼拝式に使われる黒と白」である。その構成に挑戦するように、突然「深紅の膝掛けがそのすそにかかっていた」と描写される。修道僧の庵をしのばせる部屋の装飾はこの派手な色の一撃で乱され、われわれを眩惑させる。また、彼は孤独に固執する生活のなかで、読書や食事とともに、音楽を享受する。しかし、彼がシニコウ夫人と知りあうのも二人のあいだの情緒上の「融合」に助力するのもこの音楽であり、しかも彼が愛好するモーツァルトの音楽には古典的均整の構成のなかに官能がやどっている。こういうダフィーにつきまとう矛盾から、彼は中産階級の因襲からの撤退を装っているにすぎず、しょせんはカトリック教の落とし子である、と語り手さらには作者が主張しているように思われる。一人の女性と知りあって、他人との情緒的な絆を拒否する姿勢をくずすのも、彼の信念が確固たるものでないということにほかならない。

信仰や愛を排し、人生に必要な日常の価値を軽蔑し、相互扶助に消極的であり、社会の拘束から逃れている。それでいてそれが徹底できないダフィーは近代都市に住み本性を失った知識人の典型である、とわれわれにはうつる。ともあれ、ジョイスは、ダフィーの外観、生活環境、個性、職業、そして習慣などを詳細に提出することで、分裂した性格の男の物語のお膳立てをした。そしてこの男が一

女性と知りあう第五パラグラフからは、物語の進行に加速がつくのである。

三

ダフィーが密閉された状態に自己をおき、外部との接触がないときは摩擦はなかった。しかし、エミリー・シニコウと知りあうと、閉ざされた自己に風穴があき、自衛手段としての彼特有の言語形態にも変化が起こる。それとともに、語り手の語りのなかに、ダフィーだけでなくシニコウ夫人の視点や言葉づかいがもちこまれる。たとえば、ある音楽会で再会した際の「うちとけた仲になった」('to become intimate')という言い回しは、S・K・ハイマンによると、中流階級以上に属する婦人が使うような気どった話し方である。また、「ダフィー氏は夫人との交際を楽しむ機会が多かった」('Mr Duffy had many opportunities of enjoying the lady's society')「彼も彼女も今までこのような冒険をしたことがなかった」('Neither he nor she had any such adventure before')などもふくめて、「淑女らしい、ケーキにかける糖衣の言い回し」であると言う。さらに、客観的な語りのなかに、ダフィーのものだけでなく、「名前はシニコウ夫人で、夫の祖父の祖父はレグホーンの出身です。夫はダブリンとオランダを往復する商船の船長で、子供は一人です」というように、シニコウ夫人の言葉と思われる言い回しが頻繁にはいりこむ。二人の交際がすすむと、「少しずつ彼は自分の考えを彼女の考えにからみ合わせた」(「ほぼ同じ表現がもう一度繰り返されていることに留意したい」と語られるが、この物語では「からみ合わせた」('entangled')とは、二人の言葉がからむのであって、男と女のからみではない。

この二人の交際が普通の男女関係と違うのは、ダフィーのシニコウ夫人への奇異な態度のせいである。彼女のほうは情緒面を話題にし、それに陶醉する気配をみせる。それに対しダフィーは、彼女に「さまざまな思想をあてがい、彼の知的生活をわかちあう」ことを望み、それを彼女におしつけている。物語の最初の四つのパラグラフでは語り手の陳述でダフィー像が描かれたが、第十、十一パラグラフあたりでは語り手は一步退いて、ダフィーが自らの思想を間接話法と描出話法で説明するという手法がみられる。そのため、ダフィーが聞き手のシニコウ夫人にむかって直接話しているという雰囲気感が漂ってくる。作品には、彼の一方的な話ばかりがでていて、シニコウ夫人が望む身の上話などの情緒交換はでていない。

ダフィーがシニコウ夫人と交際するのは、彼女が彼独自の理念に積極的に反応し、それを素直に承認するからにすぎない。ダフィーは自己の思想や知的生活の肯定を望み、シニコウ夫人の称賛によって満足する。つまり、彼女は彼の自己満足の道具にすぎない。そして、彼は、自己の優越性を確認することで彼女に引き寄せられていく気持ちと、彼の「超人」的個人主義が彼の独立性を主張するために、彼女から身を引き離したいという気持ちとを同時に抱くのである。

このように、相反する二つの感情を抱きつつ交際を続けていると、ダフィーは彼個人のなかに内在する声が自己の精神の孤立を主張するのを強く意識する。

われわれは自分自身をあたえることはできない、とその声は言った。われわれはわれわれだけのものなのだ。(We cannot give ourselves, it said: we are our own.)

語り手は、このダフィーの幻覚を現在形を使って強調している。そのため、この箇所の直接的な表現は、二人の以後の関係の暗示以上に、一般真理を指摘したような現実感をもってわれわれに迫ってくる。

この物語は、前述したように、自己を客観的にみつめる主人公に相応するかのように、短い重要な二箇所の例外を除いては直接話法は避けられている。その二箇所の直接話法とは、ともにシニコウ夫人についてである。シニコウ夫人が物語に登場する際の、

——今夜はこんなに入りが少なくてお気の毒ね! からっぽの席に向かって歌わなくっちゃならないなんて、それはつらいことですもの。(“What a pity there is such a poor house to-night! It's so hard on people to have to sing to empty benches.”)

において、彼女に直接話させたために、この女性と主人公とのあいだに葛藤があらうとわれわれに期待させると同時に、これは彼女自身の孤独な境遇の伏線となる言葉だと痛感させる。^⑧「こんなに」(such)、「つらく」(so)を続けて使ったり、彼女の最初の言葉を感じ符で結ぶのは、彼女が情緒的に反応する性質をもっていることの暗示でもある。彼女の家庭生活は、一人娘が成人して外出がちなことと、船長である夫が「さまざまな快楽が陳列してある自分の画廊から妻をすっかりはずしてしまっていた」ことから窺われる。このシニコウ夫人にとって、ダフィーは彼女の夢をかなえてくれる理想の人物であった。しかし、「彼女の目には自分が天使

のような仰ぎ見る存在にうつっているだろう、と彼は思った」という文にみられるように、シニコウ夫人の愛情ある気づかいには彼の自惚れを助長させるだけだった。そのことに気づかないシニコウ夫人が「聴罪司祭」の立場からヒロインにかわるうとしたときに、悲劇がおこる。そして、二人の関係を彼女のほうが情緒面に進展させようとするとき、彼から交際を絶たれてしまう。シニコウ夫人の家庭生活と、彼女の暗い部屋で二人きりで過ごす際のその態度とにより、彼女のほうがダフィーに迫るという行為はわれわれには予期できる。しかし、自己本位なダフィーの目には理性を失った行為としかみえない。

シニコウ夫人と絶交後、ダフィーは「精神の秩序正しさ」を守る生活に逆戻りしたが、物語の前半と同じく語り手による外面描写で、「四年がすぎた」(Four years passed)ではじまるパラグラフで伝えられる。文体上からも、その語りは後戻りしたことになる。「そしてあいかわらず彼は毎朝電車で市内へ出かけ、毎夕ジョージ通りでつましい食事をとり、デザート代わりに夕刊を読んだあと、市の中心部から歩いて家に帰った」という、ダフィーの生彩を欠いた目録の描写のなかで、はじめの言葉の「そしてあいかわらず」(And still)には、シニコウ夫人が彼の生活にいかなるさざ波もたてることができなかったという含蓄がこめられている。なお、ダフィーの精神と行動の沈滞した状態を伝えるこのパラグラフは一種の間奏曲であり、新聞記事を読んで動揺する彼の態度を伝える後半とは内容も文体も対照的である。

四

四年の歳月がすぎ、ダフィーは音信不通だったシニコウ夫人が事

故死したという新聞記事を夕飯中に読む。彼女は夜中に、酒を買いに外出し線路を横切ろうとして汽車に轢かれたのだ。彼女の死を伝えるのに、ジョイスは、長い夕刊記事(ジョナサン・ケープ社版で二頁)をそのまま再現するという手法をとっている。M・マガラナーによれば、この記事は当時のダブリンの実際の新聞記事にちかいものとのことであり、その文体は、二流の新聞調の散文になるように工夫されていて、型にはめられたものである。物語の流れからすれば、語り手の客観的な陳述によって、彼女の酩酊した姿かまたは鉄道の線路わきの彼女の遺体を描写するのが常套であろう。それをジョイスは新聞用語を使った散文体をとおして死亡事故を伝え、われわれを実際の夕刊を読んでいる気分させる。

ところで、新聞記事では、事故の顛末を詳細に伝えることができて、その真因までは描けないという欠点がある。しかし、二人の成り行きをすでに知っているわれわれは、この表面的な記事から、シニコウ夫人の死亡は不慮のものでなく、充分に予期できる出来事と感知できる。そして、報道記事特有の曖昧な表現の、「死因はショックと急性心不全(sudden failure of the heart's action)によるものらしい」という記述からは、彼女の死因が「失恋」(broken heart)と癒しがたい孤独にあると察知する。この記事のなかで、シニコウ夫人の飲酒癖のついた最近の荒廃した生活を夫や娘が証言し、二人とも事故を「偶然的出来事」(accident)と口をそろえて言う。その夫や娘をふくめ事故の関係者一同は責任逃れの証言をし、「誰も責任は問われなかった」と記事は締めくくられている。この作品での二度目の直接話法で、彼女の死の瞬間は、「婦人が倒れるのを見たのか?」(You saw the lady fall?)「そうです」(Yes)と、そっけない機械的な問答でかたづけられる。

シニコウ夫人への哀惜の情を無視した以上のような報道記事のなかに、死ぬまで孤独な彼女の姿をわれわれは思いめぐらすことになる。そしてわれわれは、彼女の死がダフィーに関係があると認め、記事を読んで彼女に嫌悪の念を抱くダフィーに、反感をもつ。このように、小説の一工夫として物語のほぼ中心で長々とした新聞の三面記事が差し挟まれているが、この手法は記事に表われない事の真相やシニコウ夫人の内面までも推測させるといふ機能をはたす。ここにもジョイス流リアリズムの一端がみられる。

五

物語の後半では、語り手の陳述で、新聞記事に対するダフィーの激しい反応と、それに続く彼の心情の変化が描出されている。その表現方法は従来の描写から一変して、彼の心理が生々しく表現され、とくに描出話法によって彼の思考や意識を表わす場面では、一人称で展開されているような雰囲気醸成されている。

非個性的な報道記事とは対照的に、シニコウ夫人への強い反感をこめた興奮状態を示す文章がはじめる。物語の効果を狙って、語り手は客観描写で「がらんとした蒸溜酒製造所のかたわらで河はひっそりと静まり、ときおりルーカン道路沿いのどこかの家に明かりがついた」と言ってから、ダフィーの内面を覆っていた殻を剥いていく。

なんたる結末だ！……彼の魂の伴侶だって！……まったくもって、なんたる結末だ！ あきらかに彼女は生きるのに適していなかったのだ。意志の力をもたず、たやすく悪習の虜になり、文明の下積みにいる敗残者たちのひとりだったのだ。だが

ここまで落ちぶれてしまうことができるなんて！ 彼女に対してこれほど見事に思い違いをしていたなんてありうるだろうか？

ここではダフィー特有の自己を客観視する姿勢はなく、感情の激発がある。自己本位の偏見がちらつくにしても、ここで彼の人間性は復活する。物語の最後で自己嫌悪や真の孤独に陥るのもその人間性ゆえである。彼は、シニコウ夫人から心をひらくようにすすめられても、彼女の前で饒舌なほど主義主張をするだけで内面をさらけ出すことはなかった。彼女は死を代償として思いを吐いたといえよう。すると、作者ジョイスがダフィーの感情表現としてここで三度も使っている感嘆符は、「彼女のダフィーへの遺産のひとつになる」という見方もできる。

ダフィーを最初に襲った嫌悪感次第に罪の自覚へと変わっていく。ジョイスは、この変換のあいだに、ダフィーが悶々の情にかられて外出し、酒場に立ち寄る挿話を用意する。この挿話を語る二つのパラグラフのうちのはじめのパラグラフは、語り手によるゆったりとした写実的な風景描写であり、主人公のよどみない思考の流れを一時中断している。あとのパラグラフでは、ダフィーがこの酒場で瞑想を再開すると、自己批判の気持ちがわきあがり、彼は罪の意識に圧倒される。そして彼は、彼女の立場から、彼女の孤独の状態と彼の人生の現実とを結びつける。

彼女がこの世を去ったいまとなつてみると、くる夜もくる夜もあの部屋に一人で座ったままどんなに孤独な生活をおくっていたかがよくわかった。彼の人生も孤独であろう。彼も死んで、

この世からいなくなつて、ひとつの思い出となるときまでは——もっともだれかが思い出してくれるならばの話だが。

いまや彼は、孤独という点で自分も彼女も同等とみなし、彼女の生命への否定は自らの實在の否定とさとする。感傷的になつてゐるダフィーは人生の孤独にここで気づきはじめる。なお、S・K・ハイマンは、ダフィーの情緒の放出と芝居じみた表現とに注目して、ダフィーはここでメロドラマの主人公となつて陳腐な語句や大げさな比喩に訴えた、と論述している。⑩たしかに、ダフィーは性質の情緒面を抑えていたが、自己劇化の性癖を考えれば、メロドラマの要素を潜在的にもつていたといえる。

ダフィーが酒場から二人の思い出の公園に場所を移すと、彼は暗闇のなかでシニコウ夫人を身近な存在として意識し、その霊を触覚と聴覚で呼びだすことができる。彼は、かつてシニコウ夫人が彼の手をとったときに、自己の内なる声に従つてそれを拒絶した。それが、ここでは幻覚状態のなかで、彼個人の人格を唯一認めてくれた人の声と手を感じとうとする。いまや彼女の死は彼の自己防衛の壁を完全に打ち破つたのだ。「姉妹たち」の司祭や「死んだ人びと」のマイケル・フエアリーとおなじように、彼女は死んで大きな力となつたといえる。

ときには彼女の声が彼の耳に触れ、彼女の手が彼の手に触れるような感じがした。じつと立って耳をすませた。なぜ生きることを許してくれなかったの？ なぜ死刑の宣告をくだしてしまつたの？ 彼は自分の道徳がこたへに砕けるのを感じた。

ダフィーは、自己の精神とその生活からシニコウ夫人を除外した結果が一種の殺人になつたと考える。二つの疑問文は、その罪の意識から彼の内なる耳に聞こえてきた、彼女の彼に対する恨みごとである。かつて彼は自己を肉体から分離したひとつの精神とみなし、その高みから彼女を非難した。しかし、その高みから堕ちた現在、彼の心には慈悲と哀れみがやどる。彼の内部で抑制されていた情緒と感情とが彼の精神を批判しはじめる。

フェニックス公園の頂上で彼女とのことを追憶していると、恋人たち、木、河、庭園、汽車のイメージとの並列によつて、その過去は彼を苦しめる。公園の壁の影のなかで、男女たちが横たわるのを見るとき、ダフィーは自己のエゴの胸壁の向こう側に生きた人間が存在することを理解し、ここではじめて人間愛に気づく。人生から故意にあらゆる愛を締め出して人並みの生き方の受容を拒否した結果、彼は貴重な人間愛の意義を見失つていたのだつた。シニコウ夫人と「こそこそしたやり方で」会うことを拒絶した廉直な男は、「金銭ずくの人目をはばかる」男女よりも劣り、彼らから拒絶されるのを感じとる。

彼はおのれの品行方正な生活を噛み砕き、自分が人生の饗宴から見放されてきたのだと感じた。一人の人間が彼を愛してくれたらしいのに、その人の生命と幸福を拒んでしまったのである。彼女に不名誉を、それも恥すべき死刑の宣言をくだしたのだつた。……だれも彼を望んだりせず、彼は人生の饗宴から見放されているのだ。(He gnawed the rectitude of his life; he felt that he had been outcast from life's feast. One human being had seemed to love him and he had

denied her life and happiness: he had sentenced her to ignominy, a death of shame. ...No one wanted him; he was outcast from life's feast')

この物語では、文体の特徴のひとつとして、重文の二番目の節が前節の確認として修辭的な表現で強調するという手法が使われている。引用でも三つの平叙文でこの手法を使って主人公の苦境を強調している。ジョイスは、新聞記事を再読した直後からのダフィーの心の葛藤を述べるのに、感嘆文、疑問文、平叙文へと変化させたことになる。

前頁下段の引用では、人生の意味が食べ物におきかえて表現されている。この物語では、食べ物のイメージは重要で、まず型にはまった彼の生活を描出するなかで食事への言及は二箇所あった。また、事故の記事は、ダフィーの食事を中断させ、「肉体や精神の無秩序をしめすものごとく嫌悪」する彼の「胃を襲ってむかつかせ」さらに「最初に胃を襲ったショックがこんどは神経を襲ってきた」のであった。前頁下段の引用では、彼は「おのれの品行方正な生活を噛み砕く」のである。そして「人生の饗宴から見放された」という観念が過去完了時制と過去時制とによって繰り返され、ダフィーが人生の喜びから締め出されていたと痛感していることが示される。なお、ダフィーの常食である、ラガービールは加熱殺菌して貯蔵をよくしたビールであり、ビスケットは保存食であり、コーンビーフは保存肉であって夕飯としては最低の食べ物とされていた。彼は、健康によさそうな粗末な物を一人で外食して悦にいられたが、人生の饗宴から締め出されていたのであった。したがって、第一パラグラフの林檎は人生の饗宴を暗示し、それを味わうことなく

腐らせてしまうことは、ダフィーがシニコウ夫人との愛を享受しな

まま彼女を死なせてしまったことと呼応する。ダフィーの幻覚症状の極致は物語の最後から二番目のパラグラフの終わりにみられる。彼の内的対話が止まると、彼の想念はますます比喩的になる。彼はリフィー河の向こう側に貨物列車が「火の頭をした虫けらのように」暗闇をうねっていくのを見る。その汽車は、死の凶器であり、墓の中で死体を食い尽くす虫けらなのである。すると、そのエンジンのリズムミカルな騒音が追憶に耽っていた彼の内なる声に代わり、彼は汽車が視界から消えたあと機関車の低いうなりが「彼女の名前の綴りをくり返しているのを」聞く。草稿ではここは、「エミリー・シニコウ、エミリー・シニコウ、エミリー・シニコウ」(Emily Sinico, Emily Sinico, Emily Sinico) になっていた。強勢記号すらついていた。完成版ではそのような露骨な表現から間接的な表現に改められた。

作品の最後では、機関車の響きが消えたあと、ダフィーには思考力が失せ、感情を持続させる気力もない。彼は聴覚にたよってひたすら耳をすませ、すべての声が失われているのを認識する。ジョイスは主人公の絶望を簡潔な文をつみかさねて描き出している。

暗闇のなかで彼女が身近にいることも、彼女の声が彼の耳に触れることも感じとれなかった。耳をすまして数分のあいだ待った。なにも聞こえなかった。夜はひっそりと静まりかえっていた。もう一度耳をすました。ひっそりと静まりかえっていた。彼は自分が孤独であると感じた。

ここでは、外部の沈黙がダフィーの内部にも浸透し、彼は自己に

語りかけることをやめたかのような印象をあたえる。最後の一文では、空虚な暗闇のなかで、ダフィーは真の孤立を実感している。物語の終わりでは、ダフィーが自己の言葉を喪失し沈黙に浸っているため、語り手が観察者の視点でダフィーの心理状態を伝えている。

この物語を締めくくる一文のなかの「彼は自分が孤独である……」(‘…he was alone’)は、かつてダフィーが自己の孤独を享受したときの「われわれはわれわれだけのものなのだ」(‘we are our own’)という所見と、文法、リズム、脚韻の点で似ている。しかし、この陳述は、前の所見と違って、現在形でなく過去形であり、複数でなく単数であり、一般論ではなく個別論である。

六

ジョイスの描くアイルランドの首都ダブリンに住む人びとは、因襲(とくに宗教)、政治、家族などに縛りつけられている。ダフィーは、他の物語の人物たちが陥る落とし穴を避けるために、哲学や文学を求め、人生の脅威に対して防壁をきずいて自分自身を閉じこめようとした。あらゆる落とし穴を避けることにおいて、人生そのものをも避けていたのである。しかし、彼は物語の終わりにかくくなって自己の生き方が無益と気づき、自責の念にかられる。不死鳥(フェニックス)の名をもつ公園で、ダフィーにこの突然の精神的顕現(ジョイスの言うエピソード)がおとずれるとき、われわれの彼に対する感情がそれまでの違和から同情の念にかわる。ここに、われわれはこの作品の救いをみいだすのである。

「痛ましい事件」は『ダブリンの人びと』十五編中十一番目に配列され、個人を描いた物語の最後の作品であり、つぎの「委員会室での暮の日」からは個人でなくダブリンの社会集団が扱われている。

「痛ましい事件」はそこまでの個人の物語に有終の美を添える作品であり、最後の「自分が孤独であると感じた」という文章は、個人を扱った物語、とくに四番目の「イーヴリン」からの八作品の締めくくりとして適切である。それはすべての主人公を代弁し、各物語の主題となる言葉だからである。『ダブリンの人びと』のすべての個人物語は、なんらかの愛を求めながらそれが挫折する過程を描いている。そして「痛ましい事件」は、愛の挫折が死にいたるところでそれらの最後を飾るのである。

『ダブリンの人びと』十五編の均整のとれた配列において、三番目の「アラビー」とそのつぎの「イーヴリン」のあいだで語りが一人称から三人称へ変換するように、「痛ましい事件」と社会生活を描いたつぎの三つの物語とのあいだにも技巧上の対照がある。たとえば、「痛ましい事件」では、二箇所例外を除いて直接話法はなく、物語全体では主人公の内面的変化に重点がおかれている。それが、つぎの「委員会室での暮の日」では、一箇所の例外を除いて直接話法に終始しており、また一箇所の例外を除いて登場人物たちの内面に触れていない。

十五の短編のなかで、愛の世界にはいる機会をあたえられたのは「イーヴリン」と「痛ましい事件」の主人公だけである。しかし、イーヴリンは家庭との情緒的絆に縛られて、ダフィーはそういう「悲しみにつながる絆」をもつ危険性を避けて、ともに愛の機会を失ってしまう。

「イーヴリン」から「痛ましい事件」までの八つの物語は、その配列順に二編ずつがペアになっている。このことに注目すると、「痛ましい事件」とその直前の「土」において、主人公はともに成人の独身者である。だが、ダフィーの虚栄心は「土」のマライアの

卑屈さと対照的であり、愛に対する態度も正反対である。ダフィーはあらゆる情緒的な絆を避け、その生活は沈滞している。マライアはそういう絆を求めるが、彼女は人生から締め出された「生きたままの死」の存在である。

七

「痛ましい事件」は内容面だけでなく、微妙に変化する文体などの技巧面でも卓越した作品である、という観点でここまで論じてきた。すると、ジョイスがなぜこの短編を最悪の作品と言ったのかという疑問が残る。作者が自作にあたえた評価を全面的に受け入れる必要はないが、ジョイスの「痛ましい事件」に対する評価についてはどう考えたらよいのか。

まず、ジョイスの発言の時期に注目したい。「痛ましい事件」は一九〇五年七月に書きあげられた。この作品を、書き直したいという手紙は一九〇六年八月であり、「レースのあとで」とともに最悪の作品という手紙は同年九月になっている^⑩。一九〇六年の半ば過ぎといえば、『ダブリンの人びと』では「死んだ人びと」を除く十四編が完成しており、『若き日の芸術家の肖像』（一九一六）のもととなる『ステイヴン・ヒアロウ』の執筆の最中であり、また小説を形式の面において前人未踏の分野にまでひろげた『ユリシーズ』（一九二二）の構想を練りはじめた頃である。彼はダブリンを舞台にして新しい手法で小説を書きたかったのだ。すると、実験小説を目指すその時期のジョイスにとって、「痛ましい事件」のような伝統的な手法によるまともな作品は意に満たなかったであろう。

ジョイス作品の多くは、彼自身の体験だけでなく、弟のスタニスラスをはじめとする周囲の人びとの体験や生活ぶりを無断借用して

創作したものである。「痛ましい事件」も、ある音楽会で既婚婦人と出会ったというスタニスラスの日記をもとにジョイスが物語に仕上げたのである。このような借用はジョイスの得意とするところだった。彼の描く人物は社会の軌道からはずれた人びとである。そのため、ジョイスの諸作品では、彼をも含めたダブリンの人びとが皮肉をこめて描かれているが、彼自身の心の奥底は覗かせていなかった。それに対して、「痛ましい事件」は主人公にジョイス自身の内面を強く投影させた作品である、とM・マガラナーなど数人の批評家が指摘している。それによると、ダフィーのように、ジョイスは「友達も教会も信条もなく」、中流階級の文学的価値を認めず、性的孤独を経験し、自分の知的水準を高めるためにニーチェに興味を示してその哲学に基づいた態度をとり、『ミヒヤエル・クラマー』を翻訳し、音楽に慰めをみつけた。彼はダブリンの社会の端に住むダフィーをほとんど自己のパロディ的な分身にして物語を展開させた、とのことである。すると、個人主義的知識人である主人公を分析し描写することによって、ジョイスは自己批評をするつもりだったのが、あまりにも見事な自己戯画になってしまったというのが実情ではなからうか。

本稿第五章でふれたように、ハイマンはダフィーにメロドラマ的要素をみいだしている。その要素は作品自体にもあって、「彼女と一緒にいると、外来植物が温かい土につつまれているような感じがした。幾度となく彼女は、ランプの火をともしずに、暗闇が二人をつつむのにまかせた。暗く慎ましい部屋(The dark discreet room)、孤立した二人、いつまでも二人の耳に響いている音楽、これらが二人を結びつけた」などがその一例である。原文を記した箇所では頭韻法と転移形容詞を使って感傷性を強めている。さらに、

ダフィーがシニコウ夫人と別れるのも彼女の報道記事を読むのも憂鬱な秋である。このような、作品の感傷的な要素は十五編のなかでは異様にうつる。とくに、この物語が、生活信条をもたない無知無学な主人公マリアをリアルに描いた「土」と、ダブリン訛りと俗語にみちた会話文に終始する「委員会室での蕨の日」とのあいだに挟まれているために、ますますその感が強まる。

つぎに、『ダブリンの人びと』全体の構成からこの問題を考えてみたい。ジョイスは、この作品集でアイルランドの精神史の一章を「周到な下品さをもつ文体」(style of scrupulous meanness)で書くことを意図した。そのため多くの物語では、あまり知的とは言えない人物をその中心にしている。文体も物語ごとに内容と主人公とから規定された固有のものに変えている。しかし、「痛ましい事件」では、主人公を知識人にし、相手も中産階級以上の婦人としたため、作品全体の基調は「卑俗でない文体」になってしまった。内容面からみると、ジョイスの短編には、チェーホフなりに、凡庸な人物ばかりが登場し、どこからともなく始まり、事件らしいことは起こらず、終わるでもなく終わるような締まりのない物語が多い。むしろ、ジョイスの物語ではなにも起こらないのではない。ほとんどの物語の主人公は日常の「ささいな出来事」(incident)^⑨から精神的顕現(エピソード)を物語の終わりで経験するからである。それなのに、「痛ましい事件」ではヒロインの死というジョイス作品では珍しい「大きな出来事」(case)^⑩が起こる。また、最初の四つのパラグラフでダフィー像を浮き彫りにしたこともあって、作品そのものよりも個人主義的知識人たる男の個性にわれわれは関心をもってしまふ。この点でも、「死んだ人びと」を除く他の短編と異質である。

『ダブリンの人びと』の最初の三作は、中年に達した男が自己の少年時代を回顧し、心のなかでそれを生きかえすという物語である。この語り手はその言葉づかいからして知識人であり、そのため直接話法の部分を除いては知的な文体で述べられている。以下、「レースのあとで」を除く「青年期」の三作、「痛ましい事件」を除く「壮年期」の三作、「社会生活」の三作では、「周到な下品さをもつ文体」になっている。最後の「死んだ人びと」では、ジョイス自身にちかい知識人を主人公に据えたために、その人物と主題とから規定された文体とジョイス個人の文体とが合致している。つまり、ジョイスは、最初の三作で彼個人の文体を用い、四作目の「イーヴリン」から十四作目の「恩寵」までは個々の物語におうじて規定された品のない文体にし、最後の「死んだ人びと」では自己の文体に戻した、すなわち文体の回帰をはかったという見方ができる。さらには「死んだ人びと」で、ダブリン、ひいてはアイルランドへの否定的なそれまでの態度を改めるかのように、主人公の目を作品の最後で祖国に向け直させている。

以上のように、短編集全体のなかで捉えると、「痛ましい事件」は内容も文体も整いすぎていて、最後の作品の「死んだ人びと」で内容と文体を整えるまでは、「周到な下品さをもつ文体」と締まりのない内容とでダブリンの人びとの現実を描き出そうとした作者の意図に反している。しかし、この物語は多くの『短編小説選』に収められている。がっしりとした構成をもち、伝統的な芸術作品として優れていると評価されるからである。このように、連作のなかの一作品と捉えるか、一個の独立した作品とみるかによって評価が異なってくるのである。

注

- ① たとえば、J・ゴードンは優美で美的感覚があり『ダブリンの人びと』のなかでは最高作品と言いつ、W・Y・ティンダルは作者の過少評価にかかわらず形式も見事でわれわれの関心を強く引きだす作品と言いつ、C・H・ピークは作品の構造と主題に注目して『ダブリンの人びと』のなかのもっとも重要な作品のひとつと言いつ、M・マガラナーは「愛と死」という根本的な人類の経験の主題にした力強い作品と言っている。
J. Gordon: *James Joyce's Metamorphoses*, (Dublin: Gill and Macmillan, 1981), p. 22' W. Y. Tindall: *A Reader's Guide to James Joyce*, (London: Thames and Hudson, 1971), p. 33' C. H. Peake: *James Joyce: The Citizen and the Artist*, (London: Edward Arnold, 1977), p. 35' M. Magalaner: *Time of Apprenticeship: The Fiction of Young James Joyce* (New York: Abelard-Schuman, 1959, 1970), pp. 34-5 参照。
- ② *Time of Apprenticeship: The Fiction of Young James Joyce*, p. 38 参照。
- ③ T. E. Connolly, "A Painful Case," C. Hart(ed.): *James Joyce's "Dubliners" Critical Essays* (London: Faber and Faber, 1969), p. 108 参照。
- ④ T・C・ウォールカは「精神生活の萎んだ状態をみだし、ダフィーが模範とする規律に基づくその生き方は色褪せていると指摘している」。J. C. Voelker, "He Lumped the Emancipates Together": More Analogues for Joyce's Mr. Duffy," T. F. Staley (ed.): *James Joyce Quarterly* vol. 18, no. 1, (Oklahoma: Univ. of Tulsa, 1980), p. 30 参照。
- ⑤ *James Joyce's "Dubliners" Critical Essays*, p. 108.
- ⑥ T・E・コンローは「この情熱の色が差し挟まれることは、彼とシノウ夫人との葛藤の伏線という見方をしている」*James Joyce's "Dubliners" Critical Essays*, p. 108 参照。なお、この物語は五感にうったえる場面が多いことに注意した。
- ⑦ S. K. Hyman, "A Painful Case: The Movement of a Story through a Shift in Voice," *James Joyce Quarterly* vol. 19, no. 2, (1982), p. 114 参照。なお、「ふとけた」(intimate)という語をジョイスは「男と女が親密になる」という意味をこめて使っているが、「この語は彼が影響をうけたウォルター・ヘーターが「内から深い共感によって相手を理解する」という意味で使っていること有名」。
- ⑧ ⑧の一箇所の直接話法については、本稿六頁下段で引用し言及する。
- ⑨ *Time of Apprenticeship: The Fiction of Young James Joyce*, pp. 89-90 参照。
- ⑩ *James Joyce Quarterly* vol. 19, no. 2, p. 114.
- ⑪ *James Joyce Quarterly* vol. 19, no. 2, pp. 117-8 参照。
- ⑫ ダフィーの読書による知識や彼の好む文学について、ジョイスはこの作品で多くをわれわれに語る。これらが物語を味わう手助けとなるため、多くの批評家が言及している。なかでも、マガラナーがこの作品とニーチェの超人理論との相似点を比較し、さらにこの物語とドイツの劇作家G・ハプマンの『マリアン・クラーバー』との類似点を詳細に調べているのが目立つ。*Time of Apprenticeship: The Fiction of Young James Joyce*, pp. 87-96 参照。その他として、E・ブランドバウは「痛ましい事件」と「不義と鉄道自殺を主題にした『アンナ・カレリーナ』とは本質的に違うことを指摘したあと、チャールホフの『ワーニャ伯父さん』の主人公とダフィーとにその共通点をみだしつつ」E. Brandabur: *A Scrupulous Meanness: A Study of Joyce's Early Work* (Chicago: Univ. of Illinois Press, 1971), pp. 75-6 参照。ウォールカは「超越一途から孤立したヒーローを自任す

る男を描いた、イエーツの神秘的な短編「証の石板」に「痛ましい事件」の明確な出所があると論じている。*James Joyce Quarterly* vol. 18, no. 1, pp. 25-31 参照。B・L・スローンは、この作品と、ジョイスに影響をあたえたといわれているイタリアの作家ダモンツィオの、『炎』とを比較検討している。B. L. Sloan, "The D'Annunzian Narrator in 'A Painful Case': Silent, Exiled and Cunning," *James Joyce Quarterly* vol. 9, no. 1, (1971), pp. 26-36 参照。このような指摘ができるのは、ジョイスがすべての作家に少なからぬ恩恵をこうむっており、文学的遺産を貪欲に取り入れたからにはかならない。

⑬ 場所にこのような含蓄の意味をもたせて解釈するのが許されるならば、ダフイーの住むチャペリソッドにもそれが適用できる。この三流郊外地は、アーサー王伝説の騎士トリスタンとの悲恋で有名なイズーの生誕地（地名の由来は「イズーの礼拝堂」(Chapel of Iselt)）といわれている。したがって、宗教とともに情熱のイメージがあるといえる。ただし、現代のダフリンのトリスタンは、相手の愛を拒絶し彼女を酒癖におこやる貧弱な独身の中年男である。

⑭ R. Ellmann (ed.): *Letters of James Joyce* vol. II (New York: The Viking Press, 1966), p. 151, p. 189 参照。

⑮ *Time of Apprenticeship: The Fiction of Young James Joyce*, p. 35 *James Joyce Quarterly* vol. 18, no. 1, p. 23 参照。

⑯ この語はペーターの短編の「家のなかの子」を思い起こさせる。そこでは主人公が日々の瑣末な出来事に敏感に反応し成長をとげるのを言及するのに二度使われている。

⑰ 新聞の見出しからとった表題の「痛ましい事件」は、“A Painful Incident”から、完成版では“A Painful Case”に改題された。このように変えることで、「痛ましい事件」とは、シニコウ夫人の不慮の事故死以上に、作品の最後で人生の行き止まりを認め情緒的な死を意識した男の事件となるのである。

痛ましい事件

ジェイムズ・ジョイス

ジェイムズ・ダフィー氏がチャペリゾッド^①に住んでいるのは、ダブリンの市民であつても市の中心部からできるだけ離れて暮らしたかつたからと、ダブリンの他の郊外はどれも下品で、現代風で、きざだと思つたからだつた。彼は古い陰気な家に住み、どの窓からも廃業になつた蒸溜酒製造所や、ダブリン市内を貫いている浅い河の上流を見わたすことができた。絨毯の敷いてない部屋の、非常に高い壁には絵などというものは掛かつていない。部屋の中の家具一式は彼個人で買ひそろえたのだつた。黒い鉄の寝台、鉄の洗面台、四脚の籐椅子、洋服掛け、石炭入れ、ストーブ囲いと炉辺の鉄器具類、二重底の手箱がのつている四角い机。書架は壁の一部を入り込ませたアルコーブに白木の棚板で作られていた。寝台は白い夜具でおおわれ、黒と深紅の膝掛けがそのすそにかかつていた。小さな手鏡が洗面台の上のほうにつるされ、昼のあいだは白い笠のランプが炉棚の唯一の飾りとなつた。白木造りの棚の本は大ききの順に下段から上段へと並べてある。ワーズワース全集の一冊本は最下段の棚の片すみにあり、ノート^②の布表紙に綴じ込まれた一冊の『メイヌース公教要理』^③は最上段の片すみにある。筆記用具はいつも手箱の上に置いてある。手箱の中にはハウプトマンの『ミヒヤエル・クラマー』^④の翻訳原稿が入れてあり、そのト書きは紫のインキで書かれていた。真鍮のピンで留められた薄い一束の紙も入つ

ている。これらの紙に折にふれて文章を書きつけ、皮肉な気持ちになつたときにバイル・ビーンズ^⑤の広告の見出しを最初の紙に糊づけしたのだつた。手箱の蓋を開けるとかすかな芳香が漏れてくる——新しい杉材の鉛筆か、一本のアラビア糊の瓶か、そこに置き忘れられて熟しすぎてしまつた一個のりんごのにおいだ。^⑥

ダフィー氏は肉体や精神の無秩序をしめすものをことごとく嫌悪した。中世の医者ならば彼を土星的だと言つただろう。彼の顔はこれまでの年月の物語をきざんでおり、ダブリンの街と同じ茶色をしていた。長くてやや大きめの頭には油気のない黒い髪が生えており、黄褐色の口髭は無愛想な口を完全に覆い隠してはいなかった。頬骨も彼の顔つきをきびしいものにしてゐた。だが目にはきびしさはなく、黄褐色の眉毛の下から世間を眺めているその目つきは、他人が欠点を補うような美質をみせればそれを歓迎しようとなえず気を配つてゐるのに、失望させられてばかりいる男だという印象をあつた。彼は自分の肉体に少し距離をおき、自分自身の行為を疑わしげに横目で見つめながら、生きていた。彼には奇妙な自伝執筆癖があつて、ときおり自分自身について主語に三人称を、述語に過去形を使った短い文を心のなかで作つたりした。一度も乞食に施しをしたことはなく、頑丈な棒^⑦の杖を持ってしっかりと足どりで歩いた。

彼は、長年のあいだ、バゴット通り^⑧にある私立銀行の出納係をしてゐた。毎朝チャペリゾッドから電車で出勤した。正午になるとダン・パークの店へ行き昼食をとつた。一本のラガービールと小皿に盛つた葛粉入りビスケットだ。四時には

解放される。夕食はジョージ通りの安食堂ですませた。そこならばダブリンの社交界のけばけばしい若者どもにつきあわされないですみ、献立表にもまずごまかしがないからである。夜は、下宿のおかみのピアノをひいたり、市の周辺をぶらついたたりしてすごした。モーツァルトの音楽が好きなので、たまにはオペラやコンサートに出かけた。これらが彼の生活における唯一の道楽であった。

彼には仲間も友人もなく、教会も信条もなかった。他人とかりあうことのない精神生活をおくり、クリスマスには親戚の人びとを訪ね、彼らが死ぬと墓地まで付き添うぐらいだった。こういう二つの社会的義務は昔からの体面をつくるために果たすのだけれども、市民生活を規制するさまざまな慣習にそれ以上はゆずらなかった。場合によっては銀行の金を盗んでやろうかなどと考えたりもしたが、そういう場合がおとずれることはぜったいになかったので、彼の生活はたんたんとしていって——なんの冒険もない身の上話だ。

ある晩、彼はロタンダ^⑩で二人の婦人のそばに座っていた。会場の入りが少なくひっそりとしていることは、失敗に終わるというみじめな前ぶれであった。彼の隣に座った婦人ががらんとした会場を一、二度見まわしてから言った。

——今夜はこんなに入りが少なくってお気の毒ね！ からっぽの席に向かって歌わなくっちゃならないなんて、それはつらいことですもの。

彼はこの言葉を会話への誘いにとった。驚いたことに、きまりの悪そうな素振りが彼女にはぜんぜん見えなかった。二人で話しているあいだに、彼は彼女を永遠に記憶にとどめよ

うとした。彼女の横にいる若い女がその娘であると知って、この婦人は自分よりも一歳かそこら年下だと判断した。彼女の顔は、かつては器量よしであったにちがいない、いまでも知性をとどめていた。目鼻だちがきわめてくっきりとした、卵形の顔だ。眼は非常に濃い青で、おちついていて、はじめは挑戦するようなまなざしで見つめるが、瞳孔が虹彩のなかにゆっくりと消えていく感じでそのまなざしは乱れ、一瞬感受性の強い氣質があらわになる。だが瞳孔はすぐにその力をとりもどして、あやうくさらけだしそうになったこの本性はふたたび分別の支配に屈した。かなり豊かな胸のふくらみをみせるアストラカン地のジャケットは挑むような氣配をもったつきりとうちだしていた。

彼は数週間後に、アールズフォート・テラスのコンサートでふたたびこの婦人と出会い、娘が他のことに氣をとられているすきをつかんで、うちとけた仲になった^⑪。彼女は一、二度それとなく夫のことを口にしたが、その口調からは警告するような響きは感じられなかった。名前はシニコウ夫人で、夫の祖父の祖父はレグホーン^⑫の出身です。夫はダブリンとオランダを往復する商船の船長で、子供は一人です。

偶然にも三度目に会ったとき、彼は思いきって会う約束をした。彼女は来た。この出会いを最初にして二人は何度も会った。いつも夕方におちあい、もっとも静かな所を選んで一緒に歩いた。しかしながら、ダフィー氏はこそこそしたやり方が嫌いなので、どうしても人目を忍んで会わねばならないとわかると、彼女の家によんではしいと無理に頼んだ。シニコウ船長は彼が娘に氣があると思ったから、たびかさなる彼

の訪問を歓迎した。さまざまな快楽が陳列してある自分の画廊から妻をすっかりはずしてしまっていたので、まさかだれか他の者が彼女に興味をもつなんて疑ってもみなかった。夫はひんばんに家をあげ、娘は音楽の出稽古にいくので、ダフイー氏は夫人との交際を楽しむ機会が多かった。彼も彼女も今までこのような冒険をしたことがなかったので、不釣り合いだとはどちらもまったく思わなかった。少しづつ彼は自分の考えを彼女の考えにからみ合わせた。彼女に本を貸してやり、さまざまな思想をあてがい、彼の知的生活をわかちあった。彼女はどんなことにも耳をかたむけた。

ときおり、彼の理論のお返しに彼女は身の上話をするものがあつた。ほとんど母親のような気づかいをみせて、彼の性質をなにもかもさらけ出しなさいなとうながし、彼女は彼の聴罪司祭となつた。彼は、しばらくのあいだアイルランド社会党の一部による会合に出席したことがあり、役にたたない石油ランプの照らす屋根裏部屋のなかで二十人ほどのくそまじめな労働者どものまっただ中にいると、なんだか自分だけが別の人物になつた感じがしたと彼女に言つた。党が三派に分裂して、それぞれが別の指導者のもとで別の屋根裏部屋に集まるようになると、彼は出席するのをやめた。労働者なんて討論ではびくついていくくせに、賃金問題になると、とたんに並はずれた関心を示すのですよ、と彼は言つた。彼の感じでは、あの連中はこわい顔をした現実主義者で、彼らの手には届かない余暇から生まれる、厳密な思想に恨みをもっているようだ。社会革命なんか何世紀ものあいだダブリンでは起こりそうもありませんよ、と彼は彼女に言つた。

彼女はなぜご自分の考えをお書きにならないのと彼にたずねた。なんのために、と気を配りながらも嘲笑を込めた口調で、彼はたずねかえした。六十秒間だって物事を一貫して考えることのできない、美辞麗句をならべたてるだけの連中と張りあうためにですか？

道徳は警官にまかせ芸術は興行師にまかせ、愚鈍な中流階級の批判を甘んじて受けるためにですか？

彼はダブリンの郊外にある彼女の小さな家にしばしば出かけた。しばしば二人だけで夕べをすごした。少しづつ二人の考えがからみ合うにつれて、もっと身近な話題を語りあうようになった。彼女と一緒にいると、外来植物が温かい土につつまれているような感じがした。幾度となく彼女は、ランプの火をともしずに、暗闇が二人をつつむのにまかせた。暗く慎ましい部屋、孤立した二人、いつまでも二人の耳に響いている音楽、これらが二人を結びつけた。この結びつきによって、彼の心は高ぶり、性格の粗い角はとれ、精神生活は情感をおびてきた。彼はときどき、自らの声の響きに耳をかたむけている自分に気がついた。彼女の目には自分が天使のような仰ぎ見る存在にうつっているだろう、と彼は思った。そして、相手のこの熱烈な性質をますます身近に引きよせていくとき、彼自身のものだとわかつてはいても、これまで聞いたこともなければだれのものともいえない声が、魂の孤独はいやしむたいのだぞ、と言ひ張っているのが聞こえた。われわれは自分自身をあたえることはできない、とその声は言つた。われわれはわれわれだけのものなのだ。こういう談話の結果に、ある晩、シニコウ夫人はいつになくむやみと興奮し

た様子をみせてから、彼の手を熱情をこめてつかみ、それを彼女の頬に押しつけた。

ダフィー氏は非常に驚いた。彼の言葉をそんなふうには彼女が解釈していたということに幻滅を感じた。彼は一週間のあいだ彼女を訪ねなかった。それから、会っていただきたいという手紙を書いた。彼は二人の最後の対談がけがされた告解室の影響をうけて乱れるといけないと思ったので、彼らは公園口の近くの小さな洋菓子店で会った。冷たい秋の天気だった。冷えたけれど、彼らは三時間ちかくもその公園の道をあちこち歩きまわった。彼らは交際を絶つことに話をきめた。

あらゆる絆は悲しみにつながる絆なんです、と彼は言った。公園から出ると彼らは黙って電車のほうへ歩いていった。だが、ここで彼女が激しく震えだしたので、また彼女がとり乱すのではと恐れて、彼はすばやくさよならを言って立ち去った。二、三日後、彼の本と楽譜の入った小包を受けとった。

四年がすぎた。ダフィー氏は以前のたんとした生活にもどった。その部屋はいいかわらず彼の精神の秩序正しさを立証していた。いくつかの新しい楽譜が下の部屋の譜面台をふさぎ、書棚にはニーチェの二冊の本、『こうツァラトゥストラは語った』と『楽しい知識』が並んでいた。手箱に入っている紙の束に書きこむことはめったになかった。シニコウ夫人との最後の面談の二か月後に書かれた文章のひとつはこうだった。男と女のあいだには、性的関係があつてはならぬゆえに、愛は不可能である。男と女のあいだには、性的関係があらねばならぬゆえに、友情は不可能である。彼女に会うといけなないので、彼はどのコンサートからも遠ざかった。彼

の父が死んだ。銀行の副頭取が引退した。そしてあいかわらず彼は毎朝電車で市内へ出かけ、毎夕ジョージ通りでつましい食事をとり、デザート代わりに夕刊を読んだあと、市の中心部から歩いて家に帰った。

ある夕方、彼がコーン・ビーフ入りキャベツを一切れ口に入れかけたとき、その手は止まった。彼の目は水差しに立てかけた夕刊の、ある記事にくぎづけになった。彼は一切れの食べ物を皿にもどして、注意深くその記事を読んだ。それからグラスの水を飲み、皿を片側に押しやり、新聞を二つ折にして両肘のあいだに置き、なんどもなんどもその記事を読んだ。キャベツは冷め、白い脂が皿にたまりはじめた。女の店員がそばにきて、その食べ物うまう料理されてませんかとたずねた。彼は大変おいしいと言って、やつのことで二口、三口食べた。それから勘定をすませて外へ出た。

彼は十一月の薄暗がりのなかを足ばやに歩きつづけた。頑丈な木の杖が規則正しく地面を打ち、淡黄色の『夕刊メル』の端が体にびったり合った両前の外套の脇ポケットからのぞいていた。公園口からチャペリゾッドへつうじる人通りの少ない道までくると、彼は歩調をゆるめた。地面を打つ杖の勢いは弱まり、乱れた呼吸は、ため息のような音をとまなうといつてよいほどで、冬の空気のなかで凝結した。家に着くとすぐさま寝室へ上がっていき、ポケットから新聞を取り出して、薄れていく窓辺の光でその記事をもう一度読んだ。彼はそれを声に出さずに読んだけれど、司祭が祈禱の「密誦」を唱えるときのように唇を動かしていた。記事は次のとおりである。

シドニー・パレイド駅で婦人死ぬ

痛ましい事件

本日ダブリン市立病院で代理検屍官は（レヴァレット氏不在のため）、昨夜シドニー・パレイド駅で事故死したエミリー・シニコウ夫人^(四)の検死をした。調べによると、亡くなった夫人は線路を横切ろうとしてキングスタウン^⑤発十時の普通列車の機関車にはねられ、頭部と右脇腹に負傷したのが原因で死亡したものだ。

ジェイムズ・レノン機関士は鉄道に勤務して十五年になると証言した。車掌の笛を聞いて発車させたが、一、二秒後に大きな叫び声を聞いたので停止させた。列車は徐行していたという。

赤帽のP・ダンの話では、発車間際に一人の女性が線路を横切ろうとしているのを見つけた。そのほうに走っていき叫んだが、追いつかぬうちに、機関車の緩衝器に引っかけられて地面に倒れたという。

陪審員——婦人が倒れるのを見たのか？

証人——そうです。

クロリー巡査部長の証言によると、現場に着いたとき、その被害者は息絶えた様子でプラットフォームに横たわっていた。部長は遺体を待合室に運ばせ救急車の到着を待ったという。

警官五七Eはこれを確認した。

ダブリン市立病院副外科医ヘルピン博士の話では、死亡者は下部肋骨二本を骨折し、右肩に強度の打撲傷を受けている。頭部右側の外傷は転倒の際に受けたもの。その外傷は常人の場合には致命傷とはならない。同博士の意見では、死因はショックと急性心不全によるものらしい。

H・B・パタソン・フィンレイ氏は、鉄道会社を代表して、この事故に深い遺憾の意を表した。会社は、人びとが跨線橋を渡らずに線路を横断するのを防ぐため、各駅に掲示をかかげ、踏切に特許開閉機を使うなどして、つねに万全の策を講じてきた。亡くなった方は深夜にホームからホームへ線路を渡る習慣があり、本件の他の状況から考慮しても鉄道員側には責任がないと思われる、と同氏は述べた。

死亡者の夫でシドニー・パレイド通りのレオヴィルに在住のシニコウ船長も証言した。その話によると、死亡者は船長の妻である。本今朝ロツテルダムから帰ったばかりで事故当時はダブリンにいなかった。結婚して二十二年になり、二年ほど前までは円満に暮らしていたが、その頃から妻は酒に溺れがちになった。

メアリー・シニコウさんによると、最近の母は夜中に酒を買いに外出する癖があった。当証人はしばしば母を説得しようとし、禁酒同盟に加入するようにも勧めていた。彼女が帰宅したのは事故の一時間後だという。

陪審員一同は医学的根拠に基づいて評決をくだし、レノンには責任はなく無罪とした。

代理検屍官は、本件はまことに痛ましい事件であると言いい、シニコウ船長とその娘に深い弔意を表した。将来同様の

事故が発生するのを防ぐため、鉄道会社に対して強力な手段をとるよう勧告した。誰も責任を問われなかった。

ダフィー氏は新聞から目をあげて、窓越しにわびしい夕景色を眺めた。がらんとした蒸溜酒製造所のかたわらで河はひっそりと静まり、ときおりルーカン道路沿いのどこかの家に明かりがついた。なんたる結末だ！ 彼女の死亡についての記述全体に彼は不快を覚え、自分の神聖視していたことをたえず彼女に話していたのだと思うと不快を覚えた。古臭い文句、空疎な弔意の表現、ありふれた俗悪な死に方の詳細を隠すように丸めこまれた記者の用心深い言葉、そのどれもが胃を襲ってむかつかせた。彼女はみずからの品位をおとしただけではない。彼の品位もおとしたのだ。彼女の悪徳の、それも哀れな姿で悪臭をブンブンさせた、むさ苦しい地域が彼の目の前にうかんだ。彼の魂の伴侶だつて！ 足もとがふらつくみじめな連中のことを考えた。彼らが缶や瓶を持っていてパーテンに酒を入れてもらっているのかつて見たことがある。まったくもって、なんたる結末だ！ あきらかに彼女は生きるのに適していなかったのだ。意志の力をもたず、たやすく悪習の虜になり、文明の下積みにいる敗残者たちのひとりだったのだ。だがここまで落ちぶれてしまうことができるなんて！ 彼女に対してこれほど見事に思い違いをしているなんてありうるだろうか？ 彼はあの晩の彼女の感情の爆発を思い出し、これまでよりも苛酷な解釈をくだした。いままやなら戸惑うことなく自分がとった方針を容認することができた。

光が薄れて、記憶がとりとめもなくさまよい始めると、彼女の手が彼の手に触れたように思った。最初に胃を襲ったショックがこんどは神経を襲ってきた。彼はいそいでオーバーと帽子を身につけて外出した。冷たい空気が戸口で彼を迎え、オーバーの袖に忍びこんできた。チャペリゾッド橋の酒場まで来ると、中に入って熱いパンチを注文した。

店の主人は媚びるように給仕してくれたが、すずんで話しかけてはこなかった。店には五、六人の労働者がいて、キルデア州のある紳士の土地の価格について議論していた。彼らはときたま一ポイント入りの大コップの酒を飲み、煙草を吸い、しきりに床に唾をはき、ときどき重い深靴でおが屑をかき寄せては唾にかけた。ダフィー氏は丸椅子に腰掛け、彼らに目をむけてはいたが、見ていたのでも話を聞いていたのもなかった。しばらくして彼らが出ていくと、彼はもう一杯パンチを注文した。その一杯で彼は長いあいだ座っていた。店は静まりかえっていた。主人はカウンタに腹ばいになって、『夕刊ヘラルド』^④を読みながら、あくびをした。ときおり、外の人気のない道を電車がゴウーと音をたてていくのが聞こえた。

そこに腰かけて、彼女との日々を思いおこし、いま心に抱いている彼女の二つのイメージをかわる呼びびだしてみると、彼女は死んだのだ、この世からいなくなったのだ、ひとつの思い出になったのだ、と彼は実感した。不安になってきた。ああする以外になにができたというのか、と自問した。世間を欺く喜劇を彼女とつづけることはできなかった。大っぴらに同棲するなんてことはできなかった。最善と思え

ることをしたまでだ。どうして責められなきゃならんのか？ 彼女がこの世を去ったいまとしてみると、くる夜もくる夜もあの部屋に一人で座ったままどんなに孤独な生活をおくっていたかがよくわかった。彼の人生も孤独であろう。彼も死んで、この世からいなくなつて、ひとつの思い出となるときまでは——もっともだれかが思い出してくれるならばの話だ。

店を出たときには九時をまわっていた。冷たく陰気な夜だった。彼は最初に見つけた門からその公園に入り、やせこけた木々の下を歩きつづけた。四年前に二人で歩いたわびしい小道を歩きまわった。暗闇のなかにいると、彼女が身近にいるように思われた。ときには彼女の声が彼の耳に触れ、彼女の手が彼の手に触れるような感じがした。じっと立って耳をすませた。なぜ生きることを許してくれなかったの？ なぜ死刑の宣告をくだしてしまったの？ 彼は自分の道徳がこんなに砕けるのを感じた。

マガジーン丘^①の頂きに着くと、彼は立ちどまって河ぞいにダブリンのほうを眺めた。街の明かりが冷たい夜のなかで赤赤と愛想よくもつていた。斜面を見おろすと、その麓^{もと}の、公園の塀の暗がりに、寝そべった幾つかの人影が見えた。こういう金銭^{かね}すくの人目をはばかりる愛は彼の心を絶望でみした。彼はあのれの品行方正な生活を噛み砕き、自分が人生の饗宴^{きやうえん}から見放されてきたのだと感じた。一人の人間が彼を愛してくれたいらしいのに、その人の生命と幸福を拒んでしまったのであり、彼女に不名誉を、それも恥^{はにか}すべき死刑の宣言をくだしたのだった。下の塀のそばで腹はいになった連中が彼

を見守り、立ち去ってもらいたがっているのを知った。だれも彼を望んだりせず、彼は人生の饗宴^{きやうえん}から見放されているのだ。目を転じると、灰色のほのかに光る河がうねりながらダブリンに向けて流れていた。河の向こう側で貨物列車がキングズブリッジ駅^②からうねりながら出ていくのが見えた。火の頭をした虫けらのように、頑^{かたく}なに根気よく、闇のなかをうねうねといくのが。それはゆっくりと視界から消えた。それでもなお耳のなかで、機関車の根気よくたてる低いうなりが彼女の名前の綴りをくり返しているのを彼は聞いた^九。

彼は来た道をひき返したが、機関車のリズムは耳のなかで高々と鳴っていた。記憶が語るものの真実性を彼は疑いはじめた。一本の木の下で立ちどまってリズムが消えてゆくのにまかせた。暗闇のなかで彼女が身近にいることも、彼女の声^{こゑ}が彼の耳に触れることも感じとれなかった。耳をすまして数分のあいだ待った。なにも聞こえなかった。夜はひっそりと静まりかえっていた。もう一度耳をすました。ひっそりと静まりかえっていた。彼は自分が孤独であると感じた。

訳注

- ① ダブリン市の中心から西方五キロ、リフイー河の南側にある村。郊外の三流住宅地。アーサー王伝説の騎士トリスタンとの悲恋で有名なイズーの生誕地（地名の由来は「イズーの礼拝堂」(Chapel of Iseult)といわれている。アイルランド版トリスタンとイズー物語では、二人が恋愛関係におちいった場所とされている。河をはさんで反対側に、フェニックス公園がある。

- ② リフイー河。

- ③ ウィリアム・ワーズワース(一七七〇—一八五〇)はイギリスのロマン派詩人で、その作品には自然を歌った詩が多い。
- ④ 宗教の教えを説いたテクストで、ダブリンの西北二四キロの町メイヌースにある、ローマカトリックの神学校から発行された。
- ⑤ ゲルハルト・ハウプトマン(一八六二—一九四六)はドイツ自然主義の祖とされる劇作家。
- ⑥ 万病薬として売り出された薬の商品名。
- ⑦ 中世の医学では、土星の影響を受けて生まれると、憂うつで陰気な性質になると考えられた。
- ⑧ ダブリン市の東南部にある大通りで、銀行が多かった。
- ⑨ バゴット通りから西北に歩いて十五分の、市のほぼ中心部にある南北にはしっている通り。この通りには数軒の安食堂しかない。
- ⑩ ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(一七五六一—一九一)はオーストリアの作曲家。その音楽には古典的均整の構成のなかに官能が宿っている。
- ⑪ 一般に「ロタンダ」(rotunda)は「円形建物」のことだが、ここではダブリン市の北東部にある、劇や音楽のための公会堂。
- ⑫ スティーブンズ・グリーン(Stevens Green)の南側にある高台一帯をさす。
- ⑬ イタリア北西部の港町リヴォルノのこと。
- ⑭ 当時のアイルランド社会党は、おもに生活様式の向上について学習会を開く研究団体にすぎず、政治的には無力であった。
- ⑮ ダブリン湾のほとりであって、市の中心から東南約五キロのメリオン村の、裕福な住宅のならばンドニー・パレイド通りにある。
- ⑯ フェニックス公園の東南端にある入口の門。
- ⑰ 淡褐色の紙に印刷された、イギリスびいきの右翼系日刊新聞。
- ⑱ ダブリン市から東南十三キロにある港町。
- ⑲ チャペリゾッドから西五キロにあるルーカン村までの道路。
- ⑳ ダブリン市の西南にある州。

- ㉑ もうひとつのダブリンの夕刊新聞。
- ㉒ フェニックス公園の南端にある丘で、リフィー河を見おろせる。
- ㉓ リフィー河の南、フェニックス公園の東端のほぼ対岸にある、西に向かう鉄道の起点。

訳 注 解

- 一 白と黒の色彩の強い主人公の部屋は修道僧の独房を思わせるのに、その雰囲気を超える情熱の色がここでのぞいている。
- 二 才能の乏しい美術学校の絵画の教師のクラマーは、芸術の天分に恵まれた息子に期待するが、その息子は怠惰で芸術の道に身をいれず、あげくのはてに失恋から自殺してしまう。わが子の死に直面して、彼に救いや愛の手をさしのべなかったことを反省し、自己の理想実現の挫折を痛感し、その激情のあとに静かな心境がおとずれる、という一九〇〇年作の悲劇。ダフィーとクラマーとは、性格や体格、さらに大衆から離れて超然とした態度をとることなどが似ている。また、ダフィーの部屋の内装とクラマーのアトリエのそれとは著しい共通点があり、この二作品の最後のほうの、ダフィーの長い思考とクラマーの長い台詞にもその内容に共通点がある。
- 三 几帳面なダフィーが禁断の実であるりんごを食べ忘れたことに注意。
- 四 「うちとけた仲になった」(to become intimate)二人が出会うまでの、ダフィー像は、三人称単数過去形で自己について文章を作る自伝執筆癖のある彼に合わせるかのように、語り手の客観的な陳述でありながら、冷徹で突き放したような文体で描かれている。ダフィーがシニコウ婦人と親しくなるにつれて、客観的にみつめる語り手の陳述のなかに、この語句のように、ダブリンの中流階級以上に属する女性が使うような語や言葉づかいが散見される。

五 統語上はほぼ同じ文があとにも出てくるが、「からみあわせた」(can-

tangled)は男女間のからみを暗示。四参照。

六 ここは、生涯を独身でとおし孤高を守った、ドイツの哲学者で詩人のフリードリッヒ・ニーチェ(一八四四—一九〇〇)とその著書とを意識して書いた警句。『こうツァラトゥストラは語った』(一八八三—九一)と『楽しい知識』(一八八二)は、キリスト教の原理に反対し、ありきたりな社会上や政治上の価値に依存しない「超人」を称賛する、ニーチェの理論が具現化されている。ダフィーの生き方には、『こうツァラトゥストラは語った』のなかの、「友について」、「創造者の道について」、「老いた女と若い女について」、「俗衆について」などの考え方が強く反映しているといえる。

七 冷たく非個人的な新聞記事とは対照的に、このパラグラフから語り手の陳述のなかに主人公の、人間としての感情をあらわにした文体が散見される。

八 このような主人公の自己顕現(ジョイスはこれをエビファニーとよぶ)が五〇〇年ごとに我身を焼いて再生するという不死鳥(フェニックス)の名をもつ公園で起こることに注意したい。また、フェニックス公園は、トリスタンが自己の愛がかなえられないと知り絶望して引きこもった場所とされ、「トリスタンの森」の遺跡として伝説に組み込まれている。なお、「噛み砕いた」(gnawed)と「饗宴」(feast)は食事に関する用語。食事は主人公にとって日々を規則づける重要な日課として、語り手により二箇所ですべられてきた。この物語では食べ物への言及が多い。

九 「彼女の名前の綴りをくり返している」初稿ではここは「エミリー・シニコウ、エミリー・シニコウ、エミリー・シニコウ」という露骨な表現になっていた。

訳者付記……この翻訳の底本は、R・スコールド編集のテキスト(一九六七年、ジョナサン・ケープ社刊)を使用した。

James Joyce's "A Painful Case"

Yoshitaka Yonemoto

James Daffy, the hero of "A Painful Case", is a middle-aged bachelor who is dependent only on his own resources, keeping himself aloof from the confusion of the world around him. He encounters a married woman, Emily Sinico, at a concert. They have a friendship he wishes to deem spiritual. When the friendship starts to evolve into emotional dimensions on her part, he interprets her sudden gesture as a loss of self-control and breaks off with her. Four years later he happens to read the newspaper account which reports the details of her death. Stunned by the news, Daffy gradually realizes his responsibility for her degradation and death, and at the end of this story he keenly feels total isolation and the emptiness of his own life.

As mentioned above, "A Painful Case" is the melodramatized story with a simple plot. Nevertheless, the story is rated very high because of its excellent form; particularly because of the style that employs various modes of expression and plenty of images. And the delicately varied style is well in harmony with every situation placed in the hero and the turn of the plot, and heightens the artistic effect of the work.

In this paper, centering on style and point of view, I would like to discuss "A Painful Case" from the viewpoint of an elegantly completed work of art.